

## インド・香港そして神戸で考えたこと①

—林明夫の視察シリーズ I—

開倫塾

塾長 林 明夫

### 1. はじめに

自分自身を含めて、ごく身近にいる人間と同じように、現在存在する会社や非営利組織、地方自治体や国家、地域が、あたかもまるで「生きているもの」のように近頃は感じられてならない。

元気があったり、病気がちであったり、さっそうと前に向かって進んでいたり、悩み多く立ち止まったりしているようで、興味がつきない。「会社の寿命」、「国家の興亡」などと名前をつけられた本がよく読まれているようだが、私自身は「視察」や「セミナー」、様々な少人数の「勉強会」を通して深く考えさせられることが多い。

先月号の「みにむ」で、「視察の仕方」について述べさせて頂いたところ、何人かの方々から、「では、林明夫は視察を通して何を考えたかもっと具体的に述べよ」とのご意見を頂いた。非常に片寄った観点(バイアス)からのレポートになるが、せっかくのご意見なので今回から年末まで「林明夫の視察レポート」を書かせて頂く。初回は「インド」と「香港」からの報告(来月号はもし可能であるならば「失業率23%のスペイン」から、6月号はどうなってもおかしくない「北朝鮮」、7月号はあの「ハーバード大学ケネディー・スクール」からの報告の予定。毎回「おまけ」の報告も付けさせて頂くつもりなので、どうかお楽しみに)。

### 2. 「インド」と「香港」で考えたこと

①デカン高原のほぼ中央にある人口800万人のバンガロールで、「ホームレス」の人を見たのは飛行場と、街の中心部の「インターネット・カフェ」の近くだけであった。800万人も人口がいるのだからただ私の目に見えないだけで、何万人かはいるのかも知れないが、とにかく街中がきれいで、路上生活者は余り目につかなかった。何と散水車が道を清めていさえた。

エレクトロニクス・シティと呼ばれる、日本の工業団地にあたる特別区画の中にある「インフォシス社」は想像を超えるレベルであった。あの「シリコンバレー」を支えたインド人のコンピューター技術者たちがつくり上げた会社であるからかもしれない。世界の有力企業や非営利組織への24時間サービスのために、二つの通信衛星を使いこなしているのはこの会社だけだと、副社長さんが話してくれた。同行した「ランス」の鈴木社長が顔色を青くして「インフォシス社」で作成しているソフトの内容は、日本のどの会社もはるかにしのぐばかりでなく、シリコンバレーのソフト会社もかなり超えるものであると言い出した。

インドは1991年にネール氏の娘むこであった首相が暗殺されて以来、社会主義ではあるが市場経済の立場をとり、経済発展がすさまじい。18%といわれる大学進学者の多くがお金の稼げる理工系に進学を希望。とりわけコンピューター技術者を養成する大学の倍率は高く、100倍近いところもあるようだ。「インフォシス社」では、インドで毎年40万人余り育つといわれるコンピューター技術者の中でも、とりわけ優秀な社員を50倍以上の倍率で採用。徹底的に研修システムをつくり研修。そのような社員が現在1600名いる。できれば、この数を早く1

万名までもっていききたいとの副社長の発言であった。

昨年、四国の「ジャスト・システム」を半日かけて見学させて頂いたが、その何十倍も驚き、また、考えさせられた。本年4月以降日本に事務所を開設し、日本での顧客獲得に本格的に乗り出すので、また東京でお会いしましょうと言って頂いたが、イギリス人やアメリカ人以上にクリアなテープレコーダーを聞くような、また、文法的にも全く誤りのない英語を完璧に使いこなすマナー抜群のインドの人々が世界最高の技術を携えて日本に乗り込んできたなら、日本のコンピューターソフト産業は、一体どうなるのかと考えさせられた。日本は理科系離れが大学進学者の間で進んでいるが、日本の将来が心配になる。せめて群馬大学や足利工業大学、宇都宮大学の工学部と「インフォシス社」の技術者たちが組んで、インフォシスの日本語バージョンを研究し、レベルの高い刺激を受けられないかと思うことしきりである。

\*なぜ日本人は英語が使いこなせず、外国人は英語が上手かといえば、日本での英語教育は学校でもどこでもほとんど「日本語」によって行われているからである。インドで「英語は何語で教えていますか?」と行く先々で聞いたら、いちいち笑われ、「ヒンズー語やタミール語で英語を教わって英語が話せるようになるはずがない。日本人が英語が下手な理由がよくわかった」と言われた。「英語の授業は全部英語で」がインドでも常識のようだ。英語教育でも考えさせられることが多い。

②「インド」から「香港」へ向かい、バンコクでインド航空から、キャセイ・パシフィック航空に乗り換えたら鄧小平(とうしょうへい)氏の死亡の記事があった。

「黒いネコも白いネコもネズミをとるネコはみんなよいネコ」という「黒猫白猫論」で、社会主義市場経済を中国の中にほぼ完全に定着させ、何億人もの餓死寸前とまで言われた中国国民を、生命の危機から救った氏の働きは大きかった。香港の隣の「深川」経済特区は、20年前は数万人しか住んでいなかったのに、現在は600万人の大都会に変貌。中国最先端の超近代都市にさせたのも鄧氏であった。

③香港やシンガポールの一人当りのGDP(国民総生産)はイギリス以上になった。国の「経済的」発展は、鄧小平氏やリー・カン・ユー氏のような政治家一人の考え方一つで決まってしまうと考えると、非常に興味深い。今、この文章は、ロンドンに向かう英国航空の中で、シベリアの大地を見ながら書いている。もし、ゴルバチョフ氏がもっと政治力をもっていて、より完全に国内改革をやり尽げたならば、もし、エリツイン氏の健康状態がもっと正常に近く元気に活動できたら、ロシアの人々の暮らし向きは今の10倍以上は良くなっていたに違いない。

④返還前の香港はバブルのはじける前の東京とそっくり同じだ。日本円にして2億円、3億円のマンションが飛ぶように売れ、値上がると思われる不動産はどんどん買い、2~3か月後に20~30%値上がればすぐに売り、「利ざや」を稼ぐのが「ビジネス」と思っている人が多い。いつかはじけることはみんな知っているが、はじけるまでに、儲けるだけ儲けようと必死だ。どこまで香港の影響を中国が受けるかが問題だ。

一昨年、何回か上海や杭州市に行ったが、郊外を車に乗せてもらい走っていると何万台、いや何十万台もの真っ黒な色をした「耕運機」を軽トラックにした乗り物に出会い驚いた(数年前にプノンペンに行ったとき、向こうから見たこともない車が砂けむりをあげて追ってくるのを見てびっくりし、よく見たら戦車だったのでもう一度びっくりした覚えがある。中国の耕運機利用の小型トラックも驚きだ)。あれだけの台数が黒煙をあげて走りまわって大気はどうかと

例えば、鼻の中が真っ黒になるのは、ジプニーだらけのマニラや大渋滞のバンコクと全く同じだ。

中国沿海部の超スピードの経済発展は、ジェット気流に乗って日本に公害(酸性雨)をまき散らす原因ともなる。日本の政府開発援助は中国の公害問題の研究のためにも、より多く使うべきだ。

「金欲」は「物資欲」となってあらわれ、香港の人々のように全中国の人々が経済活動を始めると、生活レベルは急激に向上するかも知れないが、日本が味わったのと同じ苦しみを中国国民が味わい、人口が多い分だけ、近くの国に迷惑になる可能性も多い。

- ⑤インドは人口が約9億人ちょっと。中国は約12億人ちょっと。2国を足すと約22億人。世界の人口はおおよそ56億人と言われているので、インドと中国の二つで世界の40%を占める。「中国に行くとも騙され、インドに行くとも病気になる。近寄りたくない国である。まして行ってビジネスをするなど論外。」というのが日本人の大方の考えかもしれない。ただ両国とも社会主義とはいえ、市場経済を完全に取り入れ、「規制なし」、「自己責任」、「自助努力」を国是としてつあるので、大発展の可能性はある。経済的な苦勞もしつくしている。世界にむけて21世紀を生きようとする人は、両国を年に1～2度は訪れるべきかと思う。

### 3. おまけ—そして「神戸」

震災後神戸には5回ほど行き、その復興ぶりを見せて頂いた。芦屋に友人がお住まいなので励ましに行くのが直接目的であった。昨日はダイエーの中内功会長から、ポートピアホテルの国際会議場でこけら落しの講演をきいた。農工社会の続きは「knowledge」つまり「知識」社会が到来する。知識のネットワークを構築して21世紀を生き抜くとの主旨だ。

「地震対策は」と友人の先生に質問したら、目の高さ以上の所に物は置かないこと、できるだけ押入れの中に物は収納すること、一階建の家に住むこととのご返事だった。

大型・テレビが寝ている奥様の頭のすぐ横まで飛んできたとお聞きしていたので、テレビも押入れの中に入れておき、寝るときにはふすまを閉めた方がよいのですか、とお聞きしたら笑っておられた。

#### 注：

インドには、栃木県経済同友会・アジア部会「インド経済視察団」の一員として参加。

香港には、栃木県経済同友会・新世紀経営研究会「香港経済視察団」の一員として参加。

神戸には、「全国経済同友会セミナー」に参加のため出かけました。

参考文献：The Economist 3月1日号、23ページ～25ページ「The ASIAN MIRACLE」

— 3月7日執筆 —

震災のときに一緒にテレビを見ていた中国からの留学生に、「あんなにひどい状態なのに人々はなぜ神戸から歩いてでも逃げ出さないのか」と何回も質問を受けた。そのときは、「地震は必ずおさまり、全力を上げて復興をするためだ。逃げたら何にもできなくなる」と答えた。神戸の人々は、よくがんばってたった2年間で街をここまで立て直した。本当に尊敬に値する。